

『^{たんにしょう}歎異抄』のおはなし④

今回は、『歎異抄』第二条の前半を拝読いたしました。

今日はその続きで、第二条の後半になりますが、最初に前回までの復習を少ししておきたいと思います。

一番最初の「前序」では、『歎異抄』が書かれた理由が述べられました。

『歎異抄』は、親鸞聖人の本当の教えとは異なる教えが当時はびこったことを親鸞聖人の弟子の^{ゆいえん}唯円が歎き、その誤りを正すために唯円が書いたと思われるということをお話しました。

ですから題名の『歎異抄』は、「異なっていることを^{なげ}歎く」という字を書くわけです。

第一条では、すべての人を救うという阿弥陀如来のお誓い、すなわち本願を信じてお念仏を称えようという心が起こるときにすぐ、もうすでに救われているのだということを中心にお話ししました。

阿弥陀仏の本願は、年配の人も若い人も善人も悪人もわけへだてなく、どんな人にも平等に注がれていて、その本願に対する信心と念仏が大事であることなどが説かれました。

前回、第二条の前半では、当時の関東ではびこっていた、親鸞聖人の息子の善鸞などが説いた間違った教えに戸惑った関東のお弟子さんたちが、京都の親鸞聖人を遠路はるばる苦勞してお訪ねになられて、正しい浄土往生の道を問いただしたときの様子が記されました。

「念仏以外に往生の道があるなら教えてほしい」という弟子たちに対して親鸞聖人は、「そのようなことを私が知っていると思うのは間違いである」と、そっけないお答えをされます。

私は、「ただお念仏を称えて阿弥陀仏に救われて往生させていただくのだ」という法然上人のお言葉を信じるだけで、念仏を称えて本当に浄土に生まれるのか地獄に^お墮ちるのか全くわからない、と聖人がまたもやそっけないお答えをされたところで終わりました。

今日はその続きです。

「たとひ^{ほうねんしょうにん}法然聖人にすかされまひらせて、^{ねんぶつ}念仏して^{じごく}地獄におちたりとも、さらに^{こうかい}後悔すべからずさふらふ。」

「すかされまひらせて」というのは、だまされて、^{あざむ}欺かれてという意味です。

「さらに」は、ここでは一向に、全然、決して、という意味です。

現代語訳は以下の通りです。

〈たとえば法然上人にだまされて、念仏して地獄に堕ちたとしても、私は決して後悔はいたしません。〉

これは法然上人へのとても強い信頼感と、親鸞聖人の固い信仰心が感じられるお言葉です。

前回拝読した部分の言葉にもあったように、親鸞聖人は、師匠である法然上人のことを「よきひと」と言って絶大なる信用を置いていました。

それほどまでに、法然上人は信仰上の師と呼べる、絶対的な人だったのです。

私も仏教の勉強をしている頃に、師といえる、とても立派な先生に出会う機会がありました。

親鸞聖人の一番弟子だった性信房の末裔であられて、東京の東上野にある坂東報恩寺の住職を当時されていた坂東性純先生という方に、仏教や真宗の教えを習いました。

先生はもう亡くなられて十数年が経ちますが、当時大勢おられた先生の追っかけのおばあちゃん方に混ぜてもらって、あちこちの法座や大学での仏教思想の講義などを聞きまくりました。

坂東先生のお話は、それは素晴らしくて、すべて疑いなくうなづくことができましたから、親鸞聖人が法然上人に絶大な信頼を寄せておられたお気持ちも、少しだけ理解できるような気がいたします。

「そのゆへは、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏をまうして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いつれの行もをよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

この「とても地獄は一定すみかぞかし。」という言葉も、非常に有名です。

「自余の行」は、その他の修行、念仏以外の様々な善行ということで、座禅を組んだり滝に打たれたり、その他いろいろな厳しい修行のことです。

「仏になるべかりける身」とは、きっと悟りを開いて仏になったであろうわが身、という意味です。

「すかされたてまつりて」は、この前に出てきたように、だまされた、欺かれた、ということです。

「をよびがたき身なれば」というのは、行うことができにくい身であるから、です。

「とても」は、どのようにしても、どうせ、という意味です。

「一定」とは、確実に、決定的に、必ず、きっと、という意味です。

「すみかぞかし」は、住み家なのだ、と強く断定して言った言葉です。

現代語訳は以下の通りです。

〈なぜなら念仏以外の行に励むことで仏になれたはずの私が、念仏を称えたために地獄へ堕ちたというのなら、法然上人にだまされたという後悔もあるでしょうが、どのような修行も満足にできない私には、地獄は定められた住み家なのです。〉

もし自分の力で修行をして悟りを開くことのできる自力の人が、法然上人の言うことを聞いて他力の仏道を歩んで地獄に堕ちたなら、だまされたと思って後悔するかもしれません。

でも比叡山での修行をやめて、山を下りて法然上人の元に向かった親鸞聖人にとっては他力しかありませんし、他のどんな修行も満足にできない凡夫なのですから、もし法然上人の教えが嘘で地獄に行ったとしても、わたしはそれでいい。

そもそも自分は、地獄しか行くところがない身なのだ、というのです。

「地獄は一定すみかぞかし」という言葉からは、もうこれ以上落ちようがない所にどーんと座っておられるという感じがします。

ここには不安や動揺は全くなく、ある意味開き直った、非常に安らかな心境が感じられます。地獄のどん底に腰を据えたなら、こんな安らかさは他に決してないのではないかと思います。

哲学者の梅原猛さんという方がおられます。梅原さんは、『歎異抄』に関する解説書も数多く書いておられますが、若い頃にこの「とても地獄は一定すみかぞかし」という言葉を聞いて感銘を受けて、生きていく力が湧いたと話されていたそうです。梅原さんもおそらく絶体絶命のピンチに直面されたのでしょうか、そのような時にこの言葉を聞くと、救われて力が湧いてくるのでしょうか。

「窮すれば通ず」という言葉があります。行き詰まって困り果てると、かえって活路が見いだされるという意味ですが、本当に困ってどん底に堕ちたときには、浄土真宗の教えや『歎異抄』のこの言葉は、おそらく力強い味方になってくれるのだと思います。

「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈、虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか。」

「釈尊の説教」とは、お釈迦様が経典の中で説かれたことで、ここでは『大無量寿経』を指します。『大無量寿経』の中には、阿弥陀如来の四十八願すなわち本願が説かれており、本願とは、皆様もご存じのように、すべての人を救うというお誓いです。

ご存じのように仏教の経典も『歎異抄』同様、お釈迦様が自ら書かれたものではなく、後世の聞き書きです。お釈迦様が亡くなられた後でお弟子さんたちが集まって、お釈迦様の言葉を経典として記録に残

されたもので、これを「結集」といいます。紀元前にインドやスリランカで4回、近代以後にもビルマで二度行われました。

「虚言」とは、うそ、いつわりのことです。

「善導の御釈」とは、善導大師が7世紀に書かれた『観経疏』を指します。釈は仏の説いた経や菩薩の著わした論を解釈した高僧の著述のことで、『観経疏』は『観無量寿経』の注釈書です。法然上人や親鸞聖人はこの『観経疏』を重く見られて、教えの根幹とされました。

「そらごと」は、うそ、ありもしない作り事ということです。

「むなし」とは、ここでは事実がない、という意味で、「またもてむなしかるべからず」は、それもまた事実無根であろうはずがない、という意味です。

現代語訳は次の通りです。

〈阿弥陀仏の、すべての者を救うという本願が真実であるなら、それを説き示して下さった釈尊（お釈迦様）の教えがいつわりであるはずはありません。釈尊の教えが真実であるなら、その本願念仏のころをあらわされた善導大師の解釈に、いつわりはありません。善導大師の解釈が真実であるなら、それによって念仏往生の道を明らかにして下さった法然上人のお言葉が、どうして嘘いつわりでありましょうか。法然上人のお言葉が真実であるなら、この親鸞が申すこともまた事実無根であろうはずがないといえるのではないのでしょうか。〉

ここでは、阿弥陀仏の本願から始まって、インドの釈尊、中国の善導大師、日本の法然上人、そして親鸞聖人ご自身に及ぶ教えの伝統が説かれています。

浄土教の伝統や歴史がどこまでさかのぼるかという、弥陀の本願にさかのぼるのだということを示しておられます。

そして釈尊、お釈迦様のうえに、すでに阿弥陀仏がはたらいていることが記されています。

お釈迦様は29歳で出家されて、人間でありながら35歳の時に悟りを開かれて、45年の間、智慧と慈悲の尽きないはたらきを示されて人々を導き、80歳で亡くなられました。

釈尊は歴史上に実在した人物でしたが、普通の人には見られない何かはたらいていたのです。

迷っているものに安心を与え、苦しみ悩んでいるものには安らぎを与える、その尽きることのない不思議なはたらきが、阿弥陀なのです。

法事の時によくお称えする和讃に、次のようなものがあります。

「十方微塵世界の念仏の衆生をみそなわし 攝取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる」

〈数限りない世界の念仏する者を見通されて、摂め取って決してお捨てにならないので、阿弥陀と申し上げるのです〉という意味になります。

せつしゆふしや おさ
撰取不捨、撰めとって決して捨てないというはたらきを阿弥陀と名付けると親鸞聖人は詠うたわれました。
和讃は七五調の仮名まじりの仏教讃歌ですが、親鸞聖人は500首以上の和讃を残されています。

この教えの系譜の上に、中国で善導ぜんどうだいし大師という方が出られました。善導大師は、『観無量寿経』の注釈書であるご著書の『観経疏』かんぎょうしよの中の「散善義」さんぜんぎにおいて、信心のいわれや浄土往生に必要なことを説かれます。

ご存知のように、浄土三部経のひとつである『観無量寿経』は、インドのマガダ国で起こった、アジャセ王子による父の王ビンバシャラ王殺害の事件が題材になっているお経です。王子は父である王を幽閉してしましますが、王妃のイダイケ夫人は、夫である王を救おうとしてひそかに体に蜂蜜を塗って、それを牢の中の王なに舐めさせます。しかしそれが発覚してイダイケ夫人は激怒した王子に刃やいばを向けられて、あやうく殺されそうになります。しかし、その場に居合わせた大臣たちが王子を押しとどめ、殺されずにすみませんが、宮殿の奥深い部屋に閉じ込められてしまいます。ビンバシャラ王は、間もなく亡くなってしまいます。敬愛する夫が、自分が生み育てた王子に殺されてしまったために深い苦悩の中にあつたイダイケ夫人は、お釈迦様に救いを求めます。釈尊は夫人のために、浄土に往生する教えを説かれ、教えを聞いたイダイケ夫人は阿弥陀仏の浄土に往生することを願い、立ち直ることができたというわけです。

善導大師以前は、イダイケ夫人は、聖者せいじやが大衆を導くための方便として、仮にそのような姿をとっているのだと解釈されていました。

しかし善導大師は、イダイケ夫人を愚かな凡夫であると解釈されたのです。

ですから『観無量寿経』別名『観経』かんぎょうは、凡夫のための浄土往生の教えが説かれたお経というわけです。

こうしたところから、善導大師はそれまでの『観経』の解釈を大きく変えた人であるとして、法然上人や親鸞聖人は、善導大師の『観経疏』を高く評価されたのです。

「正信偈」に「善導ぜんどう独明どくみょう仏正意ぶつしょうい」（善導大師はただひとり仏の教えの真意を明らかにされました）という言葉がありますが、これもこのことを讃たたえておられるわけです。

『観経』では、極楽往生を願う人には上品上生じょうぼんじょうしょうから中品中生ちゅうぼんちゅうしょう、下品下生げぼんげしょうまで9種類あり、それらの人々は皆、凡夫ぼんぶであるとして、すべての人が阿弥陀仏の本願に基づいた称名念仏によって、浄土に往生できるとしました。

東急大井町線に「九品仏」という駅がありますが、九品仏駅の近くにある浄真寺じょうしんじという浄土宗のお寺さんにある九体の阿弥陀仏座像から、この駅名はつけられています。この九体の阿弥陀像は、さきほど申しました上品上生じょうぼんじょうしょうから下品下生げぼんげしょうまでの九品の往生を表わしたものです。

そして日本では法然上人の上に、人間を超えた不思議な智慧と慈悲のはたらきが現れます。この方々のおっしゃることを、自分はただ疑いなく信じて受けるだけです、そのままいただくのです、と親鸞聖人は言われるのです。

「詮ずるところ愚身の信心におきては、かくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと、云々。」

「詮ずるところ」は、要するに、究極のところ、という意味です。
「愚身」とは、愚かな私という意味です。親鸞聖人が自分のことを謙遜して言った言葉です。
「はからい」は、思慮・分別のことで、「面々の御はからい」とは、皆さん方の考え次第、ということです。

現代語訳は以下の通りです。

〈要するに、愚かな私の信心はこの通りです。この上は、念仏して往生させていただくと信じようとも、また念仏を捨てようとも、あなたがたお一人お一人のお考え次第です。このように親鸞聖人は仰せになりました。〉

私の信心というのは、これだけだとおっしゃるわけです。
一見突き放した、そっけない態度のようにも思われますが、こんなに強い確信の表現はめったにないと思います。
すべてを阿弥陀仏の本願におまかせして、善鸞事件などで乱れたお互いの議論を斥けられたわけです。自分はいくらなんでも、しかし念仏を信ずるのも捨てるのもあなた方の自由です、というのです。
深い信仰の言葉を語りながら、聖人はそれを人に押し付けようとはしていません。
このようなところに、親鸞聖人の信仰心の強さやお人柄が、よく表れているように思われます。
念仏を称えて地獄に堕ちて後悔するかどうか、あるいは信心を抱くかどうかは、すべてあなたがたひとりひとりの考え次第であるとして、決して相手を強引に説き伏せようとはしていません。
善鸞事件などによる混乱から、信仰上の大きな疑問を抱いて、やむにやまれぬ気持ちで京都へ押しかけた東国の念仏者たちを前に、聖人は自分の信仰心を、このようにさらけ出しているのです。

今日は、これくらいにしたいと思います。
次回は3月の、春のお彼岸になりますが、第三条を拝読したいと思います。
第三条では、有名な「悪人正機」の話、「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という言葉が出てまいります。どうもありがとうございました。